

発行 2014年5月1日(通算37号)
発行所 アペックス産業(株)「APEX CLUB」編集委員会
〒105-0014 東京都港区芝2-23-4
電話 03-3455-6474 FAX 03-3455-6558
ホームページ <http://www.apex-sangyo.jp>
発行人 元木 貢 (編集委員)山口力広、高塚章夫
佐々木 健
(事務局)齊藤久美

ご用命・お問い合わせ先
アペックス産業株式会社
電話 03-3455-6474
FAX 03-3455-6558

＜詳しいご案内は当社のホームページをご覧ください＞
URL <http://www.apex-sangyo.jp>

●切り取って保存してご利用ください。
キリトリ線

ギャラリー

虫の目で見た昆虫 石崎幸治

写真家、イラストレーター、エッセイスト



ツマグロヒョウモン



威嚇するオオカマキリ
ピクトリコフォトコンテスト
「三菱製紙賞」受賞作品

右・アブラゼミの羽化



右・シヨウリヨウバツタ

第9回千修イラストレーションコンテストにて
「野菜顔」で「ソトコト賞」を受賞。
2014年のカシオ社カレンダー11月に採用された作品。



ツチイナゴ

●作者プロフィール

石崎幸治 (いしざき こうじ)
1947年 東京生まれ。早稲田大学商学部卒。
2012年 第9回千修イラストレーションコンテストで
「野菜顔」がソトコト賞を受賞。
2014年 「野菜顔」がカシオ社カレンダーに採用。
2014年 ピクトリコフォトコンテストで
「オオカマキリ」が三菱製紙賞を受賞。
☆趣味は陶芸でビールのキメの細かい泡が立つ漏斗
「ピア・ジョー」が好評である。

●作者寸言

都会に住んでいる人が、遭遇する昆虫は、ハエ、蚊、ゴキブリのたぐいだから虫嫌いの人が多いのではないのでしょうか。食べ物にたかったり、人間の生き血を吸ったり、長い髭がある黒光りしたものが向かってくるとやはり不快で怖い。
でも全ての昆虫が人間に悪さをする訳ではない。野山に行くと自然の中で観察すると、昆虫は大変興味深い存在である。まず形が不思議である。でもじっとしていない、急に飛んだりするから細部を観察できない。
昆虫が棲んでいる環境も写るように撮影して、パソコンの画面でじっくり観察している。昆虫はどんな一生を過ごしているのだろう。昆虫はもっと大きくなることはないのだろうかなど興味は尽きない。



カラスについて

Q カラスを駆除してほしいのですが？
A カラスは鳥獣保護法で、許可なく捕獲、殺処分することが禁じられています。巢の撤去や、特に卵、雛の除去等は、行政に相談するか、行政に許可を得た害虫駆除業者に依頼するとよいでしょう。
Q カラスに襲われたら、どうしたらいいですか？
A 一般に都市部で見られるカラスは、ハシブトガラスです。巣は街路樹や公園の樹木の地上十七メートル程度の枝に、小枝や針金、ハンガー、樹皮、人毛、獣毛等を素材として作られています。巣に近寄ると激しく攻撃してきます。
巣に近寄ると「カッカッカッ」さらに「ガッガッ」と鳴いて威嚇し、小枝を落としたりするために、威嚇に気づいたら静かにその場を立ち去るようにしてください。
人を襲う場合、頭を蹴るように攻撃してきます。カバン等で頭を守ったり、傘等の棒状のものをかざしながら、通過するとよいでしょう。

おじやま虫

Q&A

あなたはゴキブリに触ることが出来ますか？
昨年十月に参加した「みなと区民まつり」の「東京都ベストコントロール協会のブース」では、マダガスカルゴキブリの触れ合いコーナーが大人気。子供から大人、外国人まで、多くの人が触ったり、手に乗せたりしていました。
このマダガスカル産の大型のゴキブリは、成虫になると体長約七センチにもなります。害虫のゴキブリと違って、家屋内で繁殖することはない。成虫になっても翅がなく、触ると気門からシューシューと空気を出して威嚇することがあります。
ちなみに当社には、このゴキブリに進んで触ろうという者は飼育係以外にはいませんでした。気持ちが悪く、害虫を殺す理由が、害虫防除を生業とする会社の社員として、虫好きな一般の人を、もう少し見習ってほしいという声も聞かれました。
「みなと区民まつり」では、その他、オオスズメバチや各種ゴキブリの標本、ネズミの剥製、パネル写真の展示やクイズなどを行いました。
今年も十月十一日、十二日に開催



芝西心寺町会まつりに参加
その時はぜひ「東京都ベストコントロール協会」のブースに足を運んでみてください。マダガスカルゴキブリが、あなたを待っています。

芝西心寺町会まつりに参加
当社の前に町内会の倉庫があり、毎年九月には町会まつりのため、御輿が引き出されて行きます。御輿がお弁当屋さんで世話を受けて、参加のお誘いを受けています。
今回、初めて当社から四人が参加することになり、全員、初めての御輿担ぎに、祭り足袋と半タコ(白い半ズボン)のような衣服という揃いの格好で、気分を高揚させて、いざ出陣と相成りました。
前夜来の台風も無事去って、当日の午後には快晴。御輿のお練りとなつたままでは良かったのですが、慣れない四人はスタートから担ぎ手の中心に入ってしまう、交代もままならず、担ぎ続けるはめになり、終わりの頃には息もたえだえ、やつのことで担ぎ終えました。
この四人の頑張りには地域の皆さんも大いに認識を改められました。交流を深めた良い一日となりました。今では会社のユニホーム姿で近くを歩いていると、祭りで御一緒した方と一緒に挨拶されることも多くなりました。
これからも地域に親しまれる会社でありたいと願う今日この頃です。



虫めがね

谷莊吉先生を偲んで
去る三月十七日に、当社の株主でもある谷莊吉先生が逝去されました。
先生は横浜市立大学医学部を卒業、聖路加国際病院にイン턴として勤務、日野原重明先生の薫陶を受けられました。
その後、東京大学医学研究所で内科医として勤務のかたわら、マラリアなどの熱帯病に興味を持たれ、寄生虫学部の佐々木教授に師事されました。そして、東京大学医学研究所の助教授を経て、金沢医科大学の教授として転任されました。
先生は何事にも興味を抱かれ、熱中するのが常でした。若い頃からフィギュアスケート、ピアノ、エレキギター、麻雀、テニス、スキーを楽しまれました。五十八歳の時、たまたま書道家の鈴木葉先生に出会い、書を始められました。先生の祖父が四国・宇和島藩の漢方医で書を書かれていたとのこと。医者も書も隔世遺伝だったようです。めきめき腕を上げられ、毎年「騎虎の会」という展覧会に出品されていきました。自由奔放な作風は先生の人生そのものでもありました。



谷先生の書。左側の男性が谷先生。

先生は「生と死を考える会」のデーケン先生に共鳴し、大阪の「生と死を考える会」の会長として終末医療に尽力され、ホスピス病棟の立ち上げにも取り組むご自身が立ち上げたホスピス病棟で穏やかな最期を迎えられました。心からお悔やみ申し上げます。